氏　　名	朝岡　寛史
学 位 の 種 類	博士（障害科学）
学 位 記 番 号	博甲第　８８５６　号
学位授与年月	平成　３０年　１０月　３１日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	自閉スペクトラム症児における知覚的視点取得の成立条件に関する研究

主　　査	筑波大学教授	博士（教育学）	野呂　文行
副　　査	筑波大学教授	博士（教育学）	鄭　仁豪
副　　査	筑波大学教授	博士（教育学）	柘植　雅義
副　　査	筑波大学准教授	博士（心身障害学）	佐島　毅

論文の内容の要旨

朝岡寛史氏の博士学位論文は、自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder：以下、ASD）児が、自発的に自分とは異なる視点（以下、 他視点）からの見えを推測することに困難さがあるという仮説に基づき、知覚的視点取得（perceptual perspective-taking）の成立を促進する条件を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

知覚的視点取得は、他者が何を見ているかを推測する能力のことである。その発達には、レベル 1 とレベル 2 の連続した段階がある。そして ASD 児は、特に後者の獲得を困難としている。レベル 2 視点取得では、自己視点を心的に他視点に置くこと（視点変換）が必要であり、ASD 児においては、この視点変換が十分に活性化されていない可能性がある。さらに他視点を推測するためには、自分の顔や身体の向きを他視点に合わせたりするなどの、レベル 2 視点取得スキル（level-2 perspective-taking skills 以下、PT2）を自発的に用いることが必要となる。しかし ASD 児は PT2 の自発的使用が欠如している可能性がある。

著者は、知的障害のない ASD 児がレベル 2 視点取得の獲得を困難としているのは、PT2 の自発的使用の欠如、ならびに視点変換の不活性化にあるという仮説を立て、それを実証することを本論文全体の目的としている。本論文は大きく 4 つの研究から構成されている。研究 1 と 2 では、ASD 児の PT2 の自発的使用の欠如に関して、研究 3 と 4 では、ASD 児の視点変換の不活性化に関して検討することを目的としている。

（方法）

著者は、研究 1 において、PT2 課題として地図課題（地図上のミニカーを指示された方向に動かす課題）を実施し、他視点（ミニカー視点）へと参加児を実際に移動させることが、PT2 の遂行を促進するかを確認している。この課題は、課題遂行中でも他視点の観察が可能であり、視点変換が必要のない課題であった。ベースライン（以下, BL）では、参加児に対して「右（左）に曲がります」という指示をし、それに従ってミニカーを操作するように求めた。誤反応時には、ミニカーの視点へと参加児を移動させ、その効果を検討した。

研究 2-1 は、研究 1 と同様の課題を用いて、視点の明示性という変数操作（「ミニカーからみて」の指示導入）によって PT2 の遂行が促進されるかを検討している。また研究 2-2 は、生活年齢 6・7・8 歳の ASD 群 18 名と定型発達（TD）群 53 名を対象に、研究 2-1 と同様の課題を実施し、ASD 群・TD 群および各年齢群の間での正反応数を比較検討している。

研究 3-1 は、PT2 課題として顔回転課題を実施している。この課題は、直径 80cm の顔刺激を用いて、90・180・270 度のいずれかに回転させた後、左右の目のいずれかを点灯させる。それを参加児に観察させた後、目の光を消灯し、正面（0 度）に戻して提示する。そして「どっちの目が光っていたか」について質問をし、参加児に回答を求める課題である。この課題は、他視点（回転させた状態での顔刺激）が質問に答える際に確認できないことから、視点変換が必要な課題として設定された。誤反応のあった場合は、参加児は他視点へと移動するように指示された。このとき、他視点への移動の方法（「歩いて移動」あるいは「顔と身体を向ける」）と提示刺激の種類（実物・画像）の組み合わせにより発生する、他視点移動から質問回答までのタイムラグの長さを基準に正反応数や移動時の刺激への注視時間等を比較検討している。研究 3-2 は、参加児が知覚的表象を保持できる時間を事前にアセスメントし、事例に応じたタイムラグを設け、その効果について検討している。さらに顔刺激を注視しながら他視点へ移動する行動を形成することで、課題の正反応率が上昇するかどうかを検討した。

研究 4 は、フォローアップ群 5 名（研究 3-1 と 3-2 に参加した ASD）、ASD 群 3 名、TD 群 3 名を対象に、顔回転課題の遂行中の眼球運動を測定している。さらに ASD 群を対象に、顔刺激の構成要素間（目や鼻）の配置を相互的に注視する条件が、視点取得に与える効果について検討している。

（結果）

地図課題の BL（研究 1）および非明示的教示条件（研究 2）では、TD 児と比べて ASD 児のパフォーマンスが低かった。一方で、他視点への移動（研究 1）および明示的教示（研究 2）を導入することにより、PT2 の遂行が促された。顔回転課題の BL では、ASD 児の正反応数は概ねチャンスレベルであった（研究 3、4)。他視点への移動を導入したが、事例によって効果が得られるタイムラグ条件が異なった。加えて、パフォーマンスの向上に伴って顔刺激に対する注視時間が増加し、一定期間経過後に、減少する傾向がみられた（研究 3-1)。それらを踏まえ、事例に応じたタイムラグを導入することにより、少ない試行数で達成基準に到達した（研究 3-2)。さらに眼球運動の分析の結果は、課題が達成された場合には、刺激内に含まれる構成要素間の配置を相互に注視する行動が観察された(研究 4)。

（考察）

著者は、ASD 児がレベル 2 視点取得の獲得を困難としている要因として、PT2 の自発的遂行の欠如、および視点変換の不活性化を仮説として、本研究を実施している。本研究の結果、6～8 歳の知的障害のない ASD 児において、この 2 つの仮説が支持される結果となった。PT2 の自発的遂行の欠如に関して、著者は本研究の課題設定の要因、すなわち地図に対して固定位置に座るよう指示したことが、PT2 の生起を抑制した可能性を指摘している。また視点変換の不活性化については、刺激を注視し続けながら他視点に移動するスキルの欠如、および他視点からの見えの表象を保持するスキルの欠如が、その要因として考えられると著者は指摘している。さらに知覚的視点取得を成立させるためには、他視点への移動を外的に促すこと、明示的教示を導入すること、対象刺激を注視し続けながら他視点に移動するよう指導すること、他視点からの見えの表象が保持可能なタイムラグ条件を特定すること、さらに刺激内の構成要素を相互的に注視するよう指

導することが促進条件として明らかになったと指摘している。

審査の結果の要旨

（批評）

朝岡氏が焦点を当てた知覚的視点取得の困難さは、自閉スペクトラム症児における発達的特徴のひとつである。しかしながら、自閉スペクトラム症児を対象に、知覚的視点取得の成立を促す条件を特定する研究は、これまで十分に行われていない。朝岡氏は、自閉スペクトラム症児において、レベル 2 視点取得が困難である要因として、視点取得のために必要な行動の自発的使用の欠如、および他視点を推測する際の視点変換の不活性化を研究仮説としていた。その結果、仮説とされた 2 つの要因のいずれもが知覚的視点取得の困難さと関与していること、さらにその困難さを克服するための介入条件の一部を明らかにしていることは、オリジナルな研究知見であり、高く評価できる。また研究計画に関して、少数事例研究計画法を用いて仮説を設定し、その後の群間比較法や眼球運動測定により、その仮説を実証するなど、工夫が見られる点も評価できる。知覚的視点取得の獲得が、後の社会性の発達の基礎となることを考えると、朝岡氏が示した知覚的視点取得の成立条件は、自閉スペクトラム症支援に貢献できる重要な知見であり、大変意義のある研究であるといえる。

平成 30 年 9 月 5 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。